

芸術を教養として学ぶこと

1760～70年代の「愛好家向け」アルファベット式芸術事典に即して

山口遥子（東京藝術大学）

ドイツで教養というと、まずは19世紀的ないわゆる「教養市民」(Bildungsbürger) 概念が浮かぶ。教養市民というのは大学教育を受け、官僚機構の一翼を担う文化階級的なアイデンティティのことを指すが、一八世紀末になってこうした「教養」概念が出てくる以前、「Bildung」の語はそうした意味を獲得していなかった。例えば1760-70年代のズルツァーの芸術事典を見ても、Bildungの用法はmenschlicher Bildungすなわち人間の身体の形成の意味が最も多く、次にBildung der Sitten 道徳の修養、Bildung der Geschmack 趣味の涵養というように、Bildung 単独ではなく「何かの」Bildung という形で用いられる。では一九世紀教養市民概念の一八世紀における先駆的な概念はというと、通常「学識者」(Gelehrte)という概念が名指されるのであるが、この発表ではむしろそれに対立する存在であった「愛好家」(Liebhaber/Dilettante)に注目する。「愛好家」は、芸術を理論的に考察する「学識者」や芸術を実践的に行う「芸術家」の両方に対立する存在として一八世紀の文献にしばしば登場する。一九世紀的な大学制度と密接に結びついた教養概念ではなく、現在の用法のように専門家以外でも身につけるべき知識や実践といったような意味での「教養」は一八世紀においてむしろ「愛好家」Liebhaber 論の方に現れた。ゲーテの両義的な愛好家論にも見られるように、愛好家は18世紀に必ずしも否定的に捉えられていたわけではなく、しばしば純粋な情熱をもって芸術に取り組む肯定的な存在として捉えられ、彼らに最適な芸術教育の方法が論じられた。

その中で愛好家向けの芸術理論が、体系的書物の形ではなく、素人にもとっつきやすいアルファベット式事典という形式で書かれるようになる。アルファベット式事典はドイツでは一八世紀前半を通じて出版界の一角を担っていたが、芸術の分野においては遅く、ゴットシェート(Johann Christoph Gottsched, 1700-1766)によるものが1760年、次いでズルツァー(Johann Georg Sulzer, 1720-1779)によるものが1771年に初めて世に出た。18世紀後半に至っても学术界ではアルファベット式で芸術論を記す事に対する多くの否定的見解が見られる中、ゴットシェートとズルツァーは共に「愛好家向け」という意図を掲げ、あえてアルファベット式で芸術論を記した。その執筆意図として、ゴットシェートは専門外の知識についても全く無知であるよりは事典から学んだ方が良いからであると述べるに留まったが、ズルツァーは愛好家の認識の仕方・愛好家に適した学問の仕方をより真摯に検討し、分析的方法論すなわち理論からではなく個別の事象からアプローチすること可能にするアルファベット式事典という書物の形式が愛好家の学びに最適だからであるとした。ズルツァーの見解では、アルファベット式事典は、当時しばしば批評で言われたように人にひけらかすための断片的知識を得るための書物ではなく、むしろ体系的書物を用いた本格的な学問によって到達できる地点へ、あらゆる愛好家を導くことができるような方法論として構想された書物であった。その意味で、一八世紀後期に始まったアルファベット式芸術事典は、単なる一時的な知識獲得の手段ではなく、芸術を教養として学んでいくことを鼓舞するような一つの方法論として捉えることができるのではないかと。